
感情欠落者

松本 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感情欠落者

【Nコード】

N7656A

【作者名】

松本 和

【あらすじ】

感情欠落者。彼女はそう呼ばれている。みんなから避けられ続ける彼女は、ある日母の勧めで写真展に行くことになった。

第1話：感情欠落

「どうしてあなたってそうなの？…気味が悪いわ。」実の母が吐き捨てるように私に言った。

そんなの、私を知るわけがない。なんでもわからない。ただ…ただ何にも感じないだけなのに。

私は感情欠落者だ。…親や同じクラスの人、近所の人が私をそう呼ぶんだ。

「うわぁー。可哀想。誰か拾ってあげないのかな？」道端に捨てられている犬を見て、そう言った女の子がいた。
私は道端にいる犬に目を向けた。何も感じなかった。

「綺麗な花だな。誰が持って来てくれたんだ？」教卓に飾られていた花を見て、担任の先生がみんなに聞いた。
教卓に飾ってある花をじつと見つめてみた。何も感じなかった。

「何言っただ、お前！？ははツマジウケル。」クラスメイトが腹を抑えて笑っていた。
わたしはそれまでの過程を聞いていた。何も感じなかった。

何が可哀想なの？何が綺麗なの？何が面白いの？なんで哀れんでいるの？なんで感動しているの？なんで笑っているの？
…なんで私ってこうなの？そう思っても、私の頬を涙が濡らすことも。みんなに申し訳なく思うこともなかった。

学校で自ら私に話しかけてくる人はいなかった。…いや。…一人いた。一ヶ月前から彼は学校に来ていない。

彼は唯一私に話しかけてきた、変な男の子だ。私の記憶の中に彼はしっかり存在している。

でも、彼が学校に来なくなったからといって、私は何も感じなかった。

「私」にとって彼はそれだけの存在なのだ。

ある日母が私に言った。「あなた、本当に感情がないの？ なぁーんにも感じないの？」

私は頷いた。「これに行ってみなさい。なにか変わるかもよ。」
変わるわけがないと思ったので、受け取らなかった。「絶対に行きなさい。」母は無理やり私の手の中にねじ込んだ。

一週間後私は写真展に行った。母は行けと促したものの、連れて行くことはしなかった。

電車に乗り、駅から10分歩いた。写真展は結構大きな会場で催されていた。

もったいないと思いながらも入場料を払って入場した。まだ母の勝手な態度に怒りを感じていた。

…と言っても、私の怒りは「どうして？」どまりだった。

入ってすぐのところに一枚目の写真が飾ってあった。題名は「母」だった。台所で皿洗いをしている姿だ。

じっくりと見てみても、何も感じなかった。母への怒りも消えなかった。

二枚目は「桜」という題名で、その題の通り満開の桜が写っていた。普通の人はここで足を止めて綺麗だと

見惚れるのだろうか。…とてもじゃないが、私にそんな気は起きな

かった。

その後三枚、四枚、五枚…と足を止めることなく突き進んだ。
この会場には二百枚近くの写真が飾られるらしいが、そのすべてを
見て回るのかと思うと気が滅入ってしまった。

何の感情も抱くことなくかなりの時間が過ぎていった。もう帰ろう
かと思い、今まで進んできた道を戻ろうとしたとき。
私の目はひとつの写真に釘付けになった。

第1話：感情欠落（後書き）

内容がまとまっていらないですね。
よくわからない小説になりそうです。

第2話：安藤 清太

空の写真だった。青い空がどこまでも広がっていた。あまりにも白い雲が、行く当てもなく佇んでいた。いつも見ている空がそこにはあった。

私が腕を広げても足りないくらいの大きな写真で、何もかも包み込んでくれる優しさがあった。

「綺麗だな。」私は息をするように、自然とそうつぶやいていた。

私は今までこんなに綺麗な空に気づかなかったのか。…そうか。これがみんなの言っていた綺麗か。

なんで私はこれに気がつかなかったんだろう。なんで。

悔しくて、切なくて、涙を流してしまっていた。

ひとり写真の前で涙を流している私は通行人にどのような印象を与えたのだろうか。

少なくとも、感情欠落者とは思われないだろう。

溢れ出す涙を堪えながら、私は名前を探した。この写真を撮った人の名前だ。

「安藤 清太さん」私は声にだして呟いた。私は安藤さんの他の写真を求めて奥のほうへ足を進めた。

しかし、最後の一枚まで見ても安藤さんの他の作品はなかった。かわりに売店で安藤さんの写真集を見つけた。

その日、私はあまりお金を持っていなかったが、安藤さんの写真集を買うことにした。

帰りの電車の中で私はその写真集を開き中を覗いた。
そこには先ほど見たような様々な空の写真があった。飾られていた
写真もあった。

今までにないほど私はその写真集を大切に思った。

それからというものの私の頭の中は安藤さんのことでいっぱいだった。
どんな人なのかな。

他にどんな写真を撮っているのかな。何歳なのかな。知りたいこと
は無数にあった。

色々な写真展にいつては安藤さんの写真を追い求めた。

そんな私の変化に周りの人もじよじよに気づきはじめていた。

もう私は感情欠落者と呼ばれなくなっていたんだ。

空を見れば、綺麗だと思ってて見惚れるし。それと同じように花や物
も綺麗だと思った。

以前よりよく話し、よく笑うようになった。すべては安藤さんのお
かげだった。

会いたいな。そう強く思うようになった。

そんな毎日の中で私の生活にある変化が起きた。

私が感情欠落者だったところに、私を気味悪がることもなく話しかけ
てきた男の子が突然学校にきはじめたのだ。

彼が学校に来なくなってから二ヶ月以上もたった日のことだった。

「久しぶり。」二ヶ月も会っていなかったとは思わせない声のかけ
方だった。

「久しぶり。二ヶ月も何してたの？」安藤さんの影響ですっかり普
通の女の子っぽくなりつつあった私は彼に尋ねた。

その時の彼の顔といったら忘れようがない。まるで別人を見るよう

に私を見ていた。

なんにも知らない彼が驚くのも無理はない。私はすごく変わったのだから。

「…えっと。…働いてたんだ。」やつのことそれだけ答えると彼は教室の自分の席に帰っていった。

彼が何をして働いていたのか、そんなに興味はなかったけれど、また学校に来たんだから何かあったのかな？
という程度には疑問に思っていた。

第3話：写真展

その日家に帰ってから、インターネットで安藤さんを検索した。情報をえることは出来たけれど、安藤さんの顔写真や安藤さん本人のコメントが載っているホームページはなかった。

掲示板での書き込みでも安藤さんを見たという人はいなかった。

どんな人かな？背が高そう。眼鏡とかかけてるかもな…。空の写真が多いしきつと空が好きなんだろうな。

私の中で安藤さんの想像が広がるばかりだった。

学校の昼休みに、今度はいつ写真展に行こうかな？と考えていた時に、

「ねえーねえー。」

と、最近仲が良くなった沙恵が話し掛けてきた。

彼女も写真を見るのが好きらしく、たまたまこの前ね写真展で会ってからよく話をするようになった。

「何？」

と答えると、今度写真展に一緒に行かないかと誘われた。

今まではずっと一人で行っていたし、時には二人もいいかな。思っただから、

「いいよ。」と答えた。

沙恵は来週ある写真展に行きたいと言った。

それは安藤さんも参加しているものだった。

それからしばらく沙恵とその写真展の話をした。

沙恵は可愛くて素直ないい子だ。趣味もわりと合うので、いい友達になれると思う。

その日の帰り私の頭の中は早くも写真展のことであっという間だった。

「あ〜んざ〜いさんツ！」

背後から突進しながらの呼び掛けだった！

顔をみなくともわかる。絶対にあいつだ！

「もお〜。やめてよ！びつくりするじゃん！」

私が怒ってみても当の本人はおかまいなしだった。

「斎藤君：聞いてる？」

「もちろん聞いてるよ！」

ならなんで毎回突進するんだあ！……たくさん感じるようになって黙っていることの大変さをした。

「一緒に帰ろお」

斎藤君は無邪気に笑いながら言った。私はきつと昔から彼のこの笑顔に弱かったんだろうな。いつも断り切れない。

帰り道を会話もなく二人で歩いた。なんか話すことないかな？？いい加減この空気は辛いよ。

「昼休み…沙恵ちゃんとの話してたの？」

「んー？写真展の話」

「なんで？？」

「なんでって……今度二人で見に行くからさあ！」

「も…に…たい…」

はあ？今なんとおしゃったのだ？

「聞こえなかった？俺も一緒に行きたい！……だめかな？」
だめかな？って…そんなふうに言われたら断れないって！！

「ああ。さ、沙恵に聞いてからね。」

「うん。…わかった。」

それだけ言うともた黙り込んでしまった。

一体なぜ彼は一緒に行きたいなどと言ったんだ？

そういえば、さつき沙恵の話から入ったなあ。沙恵はクラスでもかなりもてるし…もしかして斎藤君もそうなのかも。

きつとそうだ。じゃないといきなり行きたいなんて言わないはずだもんね…。

そおなんだ…斎藤君って沙恵が好きなんだ。

って別にいいよね。斎藤君のこと好きってわけでもないんだし…。

第3話：写真展（後書き）

私はかなり長編向いてないです！途中で嫌になっちゃいますね。でも最後まで書きます！！

第4話：写真展へ

それから沙恵に許可をとって、写真展には3人で行くことになった。

斎藤君わそこまで写真に興味があるようでもなくて、本当に一緒に行きたいだけのようだった。

写真展に行く当日。久しぶりに安藤さんの写真……しかもきつと新作。が見れるということで、正直私はうかれていた。

斎藤君と駅で待ち合わせて沙恵の待つ5駅先まで行く間、斎藤君とはあまり話をしなかった。

普段しつこく話しかけてくる斎藤君は、今日はなぜか信じられないくらい静かだった。

5駅目で沙恵がくるのを待っていたが、電車が駅を出てからしばらくたっても沙恵は私たちのところにこなかった。

心配になった私と斎藤君は沙恵に電話をすることにした。呼び出してかなりたったとき、やっと沙恵が電話に出た。

「ごつめ〜ん！！今の電話で起きたあ〜」「悪怯れもなくいわれたものだからつい黙ってしまった。

「私はもう間に合わないから……斎藤と2人で行ってきなよ！」沙恵はそれだけ言うと、もう一度謝ってすぐに電話を切ってしまった！！

沙恵は悪い子じゃないってわかってるけど、この時ばかりは攻めず

にはいらなかった。

ってことは……つまり……斎藤君と2人きりで写真展に行かなきゃいけないんでしょ??

そんなの気まずいじゃん！

「沙恵…今起きたみたいで、今日はこれないって。」

斎藤君に事情を説明すると

「ああ…。そおなの。」ときわめて興味なさげな答えが返ってきた！

それでいいの？斎藤君は沙恵と写真展に行きたかったんじゃないの???

なんか最近この2人に振り回されてばかりで嫌になっちゃうよ。

私は大きいため息をついてから、

「次の駅だね。」と言つぶやいて窓の外の空を見上げた。

彼の写真は今日も空の写真なのだろうか……そんなことを考えながら。

美空

彼の写真の前に立つと、すべてを許されたかのような錯覚に陥る。空の青さが綺麗で、私の汚い部分をすべて洗い流してくれる。

彼の新しい写真もそんな空だった。名前を見なくてもすぐに安藤さんがとった写真だとわかる。

不覚にも、斎藤君がいる前で泣いてしまった。

写真を見ただけで泣くなんて大げさ！？そんなわけない。安藤さんの写真は私を変えてくれたのだから。

泣いている私の横で斎藤君が静かに話しはじめた。

「空を撮るのにはわけがある。…空は綺麗だ。人間は空を愛し、決して汚してはいけない。僕はただそれを伝えたいだけなんだ。」

何度も読んだ。安藤さんの写真集の一番最後に乗っている言葉だった。

なんで斎藤君はそれを覚えているんだろう。ファンなのだろうか。疑問に思っ、斎藤君の方を見ると目が合った。

優しく微笑んで続けた。

「でも、最近は別の理由もできたんだ。ある日自分の写真も展示されていた写真展に言ったんだ。」

そこに俺の写真を見て泣いている人がいた。……最初は人違いだと思ってたんだ。だって俺が思ってた人は……写真を見て泣くような人じゃなかったから。

でも、よく見るとやっぱりその人だった。……うれしかったよ。写真を見て泣いてくれる人なんて初めてだったんだから。

それからはずっとその人のために写真を撮ったんだ。……これを見てまた感動してくれるだろうか。ってね。

2カ月。そんな写真を撮るためにどこにだっていったんだ。そして今日。俺の写真を見て、泣いてくれたね。」

安藤さんの写真は私のすべてだった。だって彼の写真があるから今の私がいるんだ。

斎藤君が写真家だったなんて知らなかった。私のことを気に掛けてくれていたなんて知らなかった。

「俺……いままでは空しか撮ったことないんだけど、次は人物を撮りたいんだ。」

どうかな。美空。」

そう。私の名前は美空。

美しい空。だからより彼の写真にひかれたのかもしれない。

………そんなの。断れるわけじゃないじゃん。

好きだよ。斎藤君も、斎藤君の写真も。

私を救ってくれた人。物。

それらに心から感謝したい。私は変わった。これからはなんだって
感じることができる。

……だけど、今はただ斎藤君への思いだけを感じていたい。

美空（後書き）

全然まとまりがありません。すみません。もしこんな小説でも読んでくれたという方がいらっしゃったら、もう本当に心から感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7656a/>

感情欠落者

2010年10月28日07時56分発行